| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 校訓 | 友　勤　自<br>愛　勉　治 | 令和8年度<br>**東中だより**<br>第13号 | 発行日 | 令和8年10月27日 |
| 教育目標 | 多様化の時代を生きる<br>心身ともにたくましい生徒の育成 | | 発行者 | 伊丹市立東中学校<br>校長　前田 徳三 |


## 【「幸せ」とは】

２学期の大きな行事である学習発表会と体育大会が終了しました。どちらの行事も子どもたちの笑顔や真剣な表情、仲間と支え合う姿に、確かな成長を見ることができました。達成感に満ちた表情や学級・学年の団結力は、本番だけでなく、そこに至るまでの努力と積み重ねの成果です。「行事は本番に至る過程で育つ」と言います。各学級、互いを認め合い、励まし合いながら、子どもたちは大きく成長していました。私自身も子どもたちから多くの感動と勇気をもらいました。保護者や地域の皆様も、子どもたちの輝く姿に心を動かされたことと思います。これからも、この経験を自信として次の成長につなげてほしいと願っています。



さて、全国学力・学習状況調査の結果でもお伝えしたように、本校では９割以上の子どもたちが「幸せを感じている」という結果が出ました。子どもたちが日々の生活の中で幸せを感じながら過ごしていることをとても嬉しく思います。

ところで、私たちはどのようなときに「幸せだ」と感じるのでしょうか。今回は、身近なようで、とても奥深い「幸せ」について考えてみたいと思います。

大きな夢がかなったとき、欲しかったものを手に入れたとき、もちろん私たちは幸せを感じます。しかし、幸せは、遠くからやってくるものばかりではありません。朝、友達と「おはよう」などと笑顔で言葉を交わすこと。できなかったことが少しできるようになること。誰かに「ありがとう」と言ってもらうこと。安心できる場所があること。そんな何気ない毎日の中にも、たくさんの幸せが隠れています。

スイスの思想家、カール・ヒルティは『幸福論』の中で、仕事に打ち込み、そこに喜びややりがいを見いだすことを幸福の大切な要素として位置付けました。勉強でも、仕事でも「やらされている」と思うと苦しくなります。先日、出席した研修会で、京都大学の石井英真（てるまさ）准教授は、「学ぶことによって物事を知る。知ることで自分の世界が広がり、それが幸せにつながっていく」というお話をされていました。

自分から一歩踏み出し、夢中になって取り組んでいくと、昨日までは知らなかったことが知れたり、できなかったことができたり、自分の成長に気づく瞬間があります。人は、自分が少し前に進んだと感じられたときにも幸せを感じます。

そして、幸せにはもう一つ、大切な姿があります。それは、誰かの幸せが、自分の幸せになることです。宮沢賢治は『農民芸術概論綱要』に、「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」と記しています。幸せは、自分一人の中だけで完結するものではありません。困っている人に声をかける。頑張っている友だちを応援する。誰かのために自分のできることをする。そんな小さな行動が相手を笑顔にし、その笑顔を見た自分の心もまた温かくなります。

「辛」という字があります。「つらい」と読みます。そこに「一」を加えると、「幸」という字になります。もちろん、漢字の成り立ちを表したものではありません。それ

でも私は、この一本の「一」を人の思いやりと考えると、とても素敵だと思います。つらそうな友だちに「大丈夫？」と声をかける。一人でいる友だちのそばに寄り添う。「一緒にやろう」と誘う。時には、何も言わず側にいてあげる。その小さな「一」が、誰かの「辛」を「幸」に変えることがあるかもしれません。

幸せには、「もらう幸せ」「できる幸せ」「あげる幸せ」があります。人から大切にされる幸せ、自分の成長を感じる幸せ、そして誰かを笑顔にする幸せです。中でも「あげる幸せ」は、不思議な幸せです。分ければ減るどころか、相手にも自分にも残り、周りへと広がっていきます。

毎日の生活では、できなかったことや足りないものに目が向きがちです。でも、ときには立ち止まり、「今日、うれしかったことは何だろう」「誰かにしてもらってうれしかったことは何だろう」「自分は誰かを笑顔にできただろうか」などと振り返ってください。もしかすると、幸せは「なるもの」でも「待つもの」でもなく、今、自分の側にあるものに気づくことなのかもしれません。そして、自分が誰かの「一」になることができれば、その幸せは、きっとまた次の誰かへとつながっていきます。

## 【ＳＮＳを正しく使い、子どもたちをみんなで守る】

スマートフォンやＳＮＳは、今や子どもたちにとって身近な存在です。友だちとの交流や情報収集など大変便利な一方で、何気なく書き込んだ一言が相手を深く傷つけたり、誹謗中傷やからかい、仲間外れなどにつながったりすることがあります。

ネット上では、相手の表情などが分からないため、「そんなつもりではなかった」という言葉でも、受け取る側にとっては大きな苦しみとなることがあります。また、「匿名だから分からないだろう」という安易な考えも禁物です。ネット上の誹謗中傷については法整備も進み、匿名であっても投稿者が特定され、法的責任を問われる場合があります。



本校では、こうしたトラブルを未然に防ぐため、子どもたちを対象としたＳＮＳ講演会を実施し、「相手の立場に立って考えること」「書き込む前に立ち止まること」「困ったときには一人で抱え込まず、周囲の大人に相談すること」などについて学ぶ機会を設けています。しかし、子どもたちをネット上のトラブルから守るためには、学校だけの取組では十分ではありません。大切なのは、学校・家庭・地域がともに子どもたちを見守ることです。

見守るとは、行動を細かく「監視」することではありません。日頃から子どもたちに「目を掛ける」こと、そして何気ない変化に気づいたときに声を掛けることです。「最近どう？」「何か困っていない？」と話せる関係が、いざというときに子どもがＳＯＳを出せる安心感につながります。

もし、ＳＮＳ上の誹謗中傷やからかい、友人関係のトラブルなど、お子さまの様子で気になることがありましたら、早めに学校へご相談ください。ともに考えていきましょう。小さなサインを見逃さず、学校・家庭・地域がつながり、子どもたちを一人にしないことが何より大切だと考えています。

便利なＳＮＳだからこそ、使わないことを求めるのではなく、「自分も相手も大切にするために、どう使うのか」を子どもたち自身が考え、判断できる力を育てていきたいと思います。ご家庭におかれましても、是非ＳＮＳやスマートフォンの使い方について、お子さまと話し合う機会をもっていただきますようお願いいたします。